

## 「ネパールの被差別カーストの運動に寄り添う」

中川 加奈子（関西学院大学社会学研究科 研究員）

「今、声をあげておかないと、置いていかれるんだ」

調査対象である「カドギ (Khadgi)・カースト」の若者の発言である。

「カドギ」は、主にネパールの首都カトマンズに古くから居住する民族集団であるネワールのひとつのカーストであり、身分制度としてのカースト制度に基づいて主に家畜の屠殺解体や食肉販売を行ってきた。長らく続いた封建体制のもと、日常生活に不当な制限が課せられ、彼らは差別に苦しめられてきた。しかしながら 2008 年 5 月、ネパールは、ヒンドゥー教を国教とする君主国から、世俗主義の連邦民主共和国に移行した。また、2011 年現在、新憲法制定に向けた議会が開催中である。このような社会政治的な大きな転換の中で、ネパールではこれまでマイノリティに位置づけられてきた個々の民族やカーストが、今こそ法の網の目にすくい上げてもらえるチャンスだといわんばかりに連日デモ行進や集会を開き、自分たちの権利を訴えている。

ネパールでは、カースト制度において不可触とされてきた人々が自分たちをダリット（抑圧された人々）」と呼ぶことがある。ネパールには、ダリット支援の I N G O が多くあり、政府もダリットを対象とした奨学金制度や優遇政策をとっている。しかしながら、カドギたちは自分たちをダリットと称したり、優遇措置を受け取ったりすることを拒否している。カドギの活動家は、ラジオのインタビューにこう答えていた。「援助が必要な人がいるのは現実。だけど援助が必要かどうかは経済状況で判断したらいい。人種とか、カーストとか、住んでいる場所で優遇措置をとってしまうと、人はそこから出られなくなる。」

カースト制度は本質的なものではなく、政治・経済的な権力によって後から創られる側面があることは、これまでに指摘されてきた。他方で、カーストによる区別自体は、現状として、諸集団がより平等な政治参加権を確保するために必要とされる政治的枠組みともなっている。「今、声をあげておかないと置いて行かれる」ネパールにおいて、声をあがるのかあげないのか、あげるとしたらどのような声をあげるのかが、問われている。

こうした状況の中、わたしはカドギの運動に書くことで被調査者に不利益な結果を与えてしまうことはないか、不安を抱えていた。たとえば「カドギはダリットではない」と書いてしまうことで新たな差別や優遇措置を望む人々の機会を奪うことに加担してしまうこともあり得るだろう。とはいえ、立ち止まる間もなく、カドギの集会で発言や会報への寄稿を求められるようになった。外国人の調査者がいることそれ自体が彼らをエンカレッジしているのだという。それを聞いて以降、できるだけ彼らの運動に寄り添いながら、自分の見てきたことを紹介し、それへの自分の解釈を話すということを心がけている。

当日は、実際にこれまでの集会で使ったパワーポイントなどを参考にしながら、わたしが彼らの運動に寄り添う際、どのような情報を被調査者であるカドギたちに向けて発信したのか、それに対して被調査者からどのような反響があったのか、これまでの対話の経緯を紹介してみたい。

## チリ開発プロジェクトでの偶然の出会い

内藤順子（日本女子大学人間社会学部）

日本の国際協力機関による、「途上国」における開発プロジェクト。両国政府が絡むような、しかも医療分野のものとなると、必然的に科学技術絶対優位的な思想が漂う現場になる傾向がある。そうした思想枠組みのなかで実施される支援活動では、様ざまのことが難しいことばで語られ、常に成果が求められる。

本報告は、そのような現場——チリの貧困地区で展開する身体障害者リハビリテーション医療プロジェクト——に、偶然、赴くことになった報告者が体験した違和感と不自由さを、どうかしたくて悶絶したプロセスを具体的に提示する。支援の現場に於いて個人が体験する人間的苦悩や思いなどというものは、およそ科学や学術とは程遠そうなものとして退けられがちである。しかし、『支援のフィールドワーク』の各論では、むしろそれが大事な要素として生きられている、と報告者は考えている。

どのような開発プロジェクトであろうと、それを推進するのは人間であり、現場は様ざまな人間同士の出会いが積み重なり、営まれている。だからこそ人間関係の悩みや、嫉妬や利害や権力関係が渦巻いているのは、至極当然ともいえる。とはいえ、そのあたりまえのことを、愚痴でも暴露でもなく上手に学術的に述べるのはまた困難でもある。

今回はあえてその困難に挑むつもりで、報告者が偶然の出会いを紡いでいくうちに出来上がった支援のありかたについて、またその試行錯誤と紆余曲折のなかから考えられた幾ばくかのことを述べたいと考えている。

# 渋川のおばちゃんたちが挑む地域づくり

——ひらかれた出逢いの「場」が次の「場」をひらいていく——

山口大学 辰己佳寿子

## ■ 「もやもや」した私と「もやもや」した渋川の人々が出逢う

「あなたは、どれだけわたしの地域のことがわかっるとるんか？よそ者がなんぼのもんじゃ！」という言葉は、今でも私が地域にかかわる際の留意点となっている。あれから十数年が経ち「もうムラは消えてしまうかもしれない、なくなってしまうかもしれない。もしムラが生き返るのであれば、どうか教えてください。・・・だからといって『助けてください』とは言いません。手助けをお願いしているわけではなく、ただ、お願いするとすれば・・・ムラが消えていくのをどうかみとってください」という地域からのメッセージを受け取った私は、地域とどのように接すればよいのだろうか。「もやもや」した状態が続いていた。

私は、渋川のおばちゃんたちとの出逢いを通して「もやもや」が晴れていく自分自身の変化を実感した。実は「もやもや」を抱えていたのは私だけではなく、渋川のおばちゃんたちも何らかの「もやもや」を抱えており、我々の出逢いは互いの「もやもや」が晴れる過程でもあった。

## ■ ひらかれた出逢いの「場」が次の「場」をひらいていく

山口県周南市鹿野の渋川地区（以降「渋川」という）は、山口県中部の山間部に位置する、県内では雪の多い地域である。渋川地区の人口は120人。このうち、約7割が65歳以上の高齢者の超高齢社会であり、いわゆる限界集落の基準をはるかに上回っている。渋川では、これまで地域づくりを主体的に担う「渋川をよくする会」が結成され、UJI ターンの推進、都市との交流、家族協定などに取り組んでいる。しかし、現在活躍しているのはいわゆる高齢者。これまでの数十年は走り続けてきたが、実は、これから十年の地域像が明確にはみえていなかった。地域づくりには何らかの「もやもや」が立ちこめており、次へ踏み出す何か求められていた。「渋川をよくする会」の会長である安永芳江さんの「次を考えるために、国境でも越えてみようかなと思ひまして」という言葉がそのときの状況を象徴している。

渋川と私とのかかわりの一連の過程は以下のとおりである。農山漁村文化協会の雑誌を通して渋川を紹介し、大学の公開講座を通して都会の日本人と渋川の人々が出逢う「場」を創出した。講座事業などの一時的な「場」では不十分であったため、次の「場」を模索したが、助成金獲得等の意図的に模索した「場」の創出は地域にとっては違和感のあるものであった。一方で、意図せざる流れのなかで、韓国の農村研究者夫婦と渋川の人々が出逢う「場」が生まれ、この「場」で感覚的に飛び出した「キムチを習いたい」という要望から、韓国でのキムチづくり講習と共通課題を抱える韓国農村の人々と出逢う「場」が生まれた。韓国での出逢いの「場」が生まれるためのいわゆる「支援」を担ったのが私であるが、この過程の瞬間・瞬間に立ち会うなかで、私自身も変化をしており、出逢い「場」が生み出すエネルギーの影響を大いに受けていたのである。

## ■ 出逢いの「場」を通して「もやもや」が晴れていく

「もやもや」した私と「もやもや」した渋川の人々が出逢い、相互行為の中で互いが一步踏み出したとき「もやもや」が晴れていく。この過程は、私が渋川の人に何かをしてあげたというより、私と渋川のおばちゃんたちが、出逢いの中で一緒に変わっていくプロセスであった。そこでは、どちらかという「考える」よりも「感じる」ことの方が大きかったように思う。考えている間は、支援する立場／支援される立場と位置付けてしまいがちである。しかし、一見論理的ではない感覚的判断がよりよい協働関係を選び分け、その動きを支え、私たちに誘ってくれることがある。そのようなプロセスに身をゆだねることを通じて、その先々で遭遇する「場」で、相手を深く知り、人々が新しい関係へとひらかれていく。ひとりひとりが変わり続けていけば、また新たな「場」が生まれる。このような連続性のなかで「支援」という言葉が変わるときがある。そこからより深い「支援」が始まるのである。

## ブルキナファソ農村の女性グループとともに

名古屋大学大学院 浅野史代

西アフリカ、ブルキナファソのとある農村に滞在して半年が経とうとしていた。時間に縛られることがほとんどないこの村で、経済活動や農作業、家事をおこなう女性たちとともに過ごしていた私も、いつしかあくせくせず、のんびりと日々を送るようになっていた。そんな私が焦りを感じ、「一度でいいから活動を見てみたい！」とマーシに訴えたのは、乾季も半ばに入ったころだった。

村には、収入向上を目的として組織された女性グループがあった。私が村に来た雨季には活動を休止していたが、乾季になったら石鹼や食用油の加工作業を再開するとグループの代表であるナーは説明してくれた。だが、乾季になっても活動が再開される様子はみられなかった。

ナーや書記のマーシとともに、休止に至った理由やグループが抱える問題を少しずつ解きほぐしていったところ、多くの問題が複雑に絡み合っていることが分かった。山積する問題を前にして、ナーやマーシたちは活動を再開するのをあきらめるのではないかと、気が気でなかったが、私が、グループが抱える問題を明らかにしようと聞き取りしたことがナーたちに変化をもたらしたのか、ナーやマーシをはじめとする数人の女性は、活動を再開することに徐々に積極的になっていった。なかでもナーは、この女性グループのプロジェクトを村にもたらした村長に、私という存在をうまく利用して活動再開の許可を訴え出た。このようなナーの変化は、決して彼女一人では成し得なかったことであり、マーシ、副代表のママ、私のそれぞれが自ら行動したことが相互作用につながったのだろう。

村長に活動再開を許可され、ようやく待ちに待った加工作業の日がやってきた。ゴマを加工して石鹼と食用油をつくり、価格を決定するのだが、価格設定の仕方に私は疑問を抱き、口を挟んだ。全体の見込み利益を確認することなく、数分のうちに安価な価格に決定されたからだ。私は、一人当たりの利益を考慮してグループ案より高い価格を提案した。しかし、女性たちは私の案に賛同しなかった。ナーたちは、値上げして売れなくなることを恐れていたのだが、理由はそれだけではなく、利益を求めること自体に躊躇する様子が見て取れた。そこには、必要以上の現金を所有することがねたみにつながるという文化的・社会的な背景があったのだ。

村に持ち込まれた開発プロジェクトも、「ねたみの文化」の例に漏れることはなかった。そして、女性たちの生活にお邪魔することで、私も「ねたみの文化」の中を生きる一人となっていた。ねたみとともにその場に居続けたこと、女性グループの調査を続けたことで、場が自ずとはぐくまれていった。「そこにいること」が支援としての意味を帯びてくる、そのような場だったのである。

## タンザニア農村の一時漂泊者

福岡教育大学 黒崎龍悟

この報告では、開発プロジェクト後のタンザニアの農村（K村）が対象となる。報告者が現場の諸アクターとのやりとりを経て、データをとるだけの調査以上のかかわりを試みたプロセスと、その結果が当初の意図からは逸れながらも、場のゆるやかな変化のきざしとなった事例について紹介する。

この試みは、村の農民グループに依頼されて、彼らが県政府からの支援を得るのに必要な申請書の作成を手伝ったことに端を発していた。こうした「手伝い」が、特別な技術や資金も必要とせず、データを取る以上のかかわり方になると思い、その内容を発展させてみたいと考えていた。そこで、二年を経て、複数の農民グループを対象とした「調査成果の報告会」を企画し、報告者の視点でグループ活動の評価をし、住民の率直な意見を交えながら、理解の共有と新たな問題の抽出・解決方法の考案を目論んだ。そのことで「本来の参加型」を実現し、その結果を県政府の支援につなげたいと考えていた。ところが、解決方法を考えるプロセスは農業普及員によって「お仕着せの参加型」に回収されてしまい、気心が知れた人たちの意見を聞くという期待は見事に当てが外れた。ただし、この影響は、後日意図しなかった形であられることになった。

隣県 M 村の農民グループから「農民グループ活動の先進地」と見込まれてレクチャーの依頼が来たので、K 村の数人とともに M 村に赴く機会があった。私は、K 村の報告会で村人とは違う視点から農民グループの活動を好意的に評価していたのだが、K 村の人びとがその内容をそのまま演説する場面があった。私が、どのように彼らを見ていたかを伝えたことが、K 村の人びとに彼らの活動を再評価する視点を提供していたといえる。この訪問を通して、今後の村を越えた住民同士の交流の可能性を垣間見ることとなった。

ある特定の地域共同体に永年定住する人びとは惰性に流れやすく、その時にそうした人びとが元気を取り戻す方法のひとつに、旅にでてしばらく外の世界を見聞し、そしてまたもとの場所に戻る、つまり「一時漂泊者」になる、あるいは「一時漂泊者」のもたらす情報にふれることがある。そうすることによって外の世界と自己の生活とを比較する視野がひらけ、それが地域共同体の内発的発展のきっかけになるという。調査・研究を目的とするフィールドワーカーは、フィールドに通い続け、そのプロセスで対象地域の人びとと共有する情報を蓄積していくなかで、半分内部者のような外部者になり、時に外からの情報・外部世界からの視点を提供する役割を期待されることもある。いわば、一時漂泊者に近い存在となると考えられる。

フィールドの人びとからの問いかけがあった場合に、内部事情を詳しく知る外部者として、彼らが外部世界との関係を考えるうえで参照できる情報などを用意して応えられるようにしておくことは重要である。フィールドに沈潜し、場面によってはもとめられてポジティブな変化をとものにぞみ、そのプロセスに柔軟にたずさわっていくフィールドワーカーが居合わせる場も、ひとつの内発的発展の形である。フィールドワーカーは、一時漂泊者として、定住者との相互作用のなかで場をはぐくむ者の一人でありつづけることだろう。

## 「場」のダイナミズムから考えること

### — 「支援のフィールドワークを深めたい人へ」 —

白石壮一郎（関西学院大学 大学院社会学研究科）

私を除く『支援のフィールドワーク』の著者たちは、なんらかのかたちで自分自身が支援活動のなかに身を置き、かつフィールドワークもおこなってきた方々である。あるいは、支援活動の現場のフィールドワークをおこなっているうちに支援活動に関わるようになった方々もいる。

国際開発援助や社会福祉などの支援活動に関わる議論も人類学・社会学のフィールドワークに関わる議論も、この四半世紀以上にわたって、主体と対象との関係性（調査する側-される側、支援する側-される側）を問うてきた歴史をもつ。多くの場合、支援という関係を取り結ぶ相手は、その出発点において、お互いが慣れ親しんでいない他者どうしである。支援という関係の始まりは、つまりは他者との関係の始まりでもあるのだ。支援活動というきっかけによって取り結ばれる他者との関係は、時間とともに変わっていく。私自身は支援活動に直接的に関わったり、支援活動を調査したりした経験はないが、自分のおこなったアフリカ農村でのフィールドワークの経験と、人類学におけるフィールドワークをめぐる議論をてがかりに、支援活動一般に関しての関係性を問う議論を考え始めることができた。

支援（者）－被支援（者）の関係は一方向的で非対称的なものとしてとらえられがちだが、本当にそうか。この非対称性は固定的なものなのか、可変的なものなのか。望ましい支援のあり方は誰が（どちらが）決めるべきなのか。非対称的な支援の関係はいずれ解消され、それぞれが相互に「自立」する未来こそが構想されるべきなのだろうか・・・などなど、どれも重要で、解答を一筋縄でたぐり寄せることのできない問題だ。こうしたミクロな関係性への注目のみに終始せず、つねにそうした関係性（とその変化）の背景にある「場」、つまり具体的な場所や場面、出来事に着目しているのが『支援のフィールドワーク』の特色かと思う。本報告では、関係性と場との相互関係に着目することの意義を、主要文献の紹介を通じながら述べていきたい。